

平成 23 年度「重点研究費」研究成果報告書

| | | | |
|------|--|-----|-----------|
| 申請区分 | C | 配分額 | 200,000 円 |
| 研究課題 | 児童の話し上手・聞き上手に至る発達的変容に関する研究 ：都内公立小学校 5 年生を対象にした縦断的研究 | | |

研究代表者

| | | |
|-------------|---------------|----------|
| 氏名 梶井 芳明 | 所属 教育心理学講座 | 職名 講師 |
|-------------|---------------|----------|

研究分担者

| 氏名 | 所属 | 職名 |
|----|----|----|
| | | |
| | | |

【研究成果の概要】（文字の大きさ 9 ポイント・字数 800 字～1600 字）

教育実践場面においては、学習指導要領の改訂に伴い、「言語活動の充実」を全教科・領域等で重点的に展開することとなった。具体的には、国語科の時間における「言葉を通じた言葉の力の育成」を基礎に、他教科・領域等において「体験を通じた言葉の力の育成」を実践していくことが求められている。

実践場面における言語活動の多くは、「話すこと・聞くこと」さらには「話し合うこと」を軸に展開されている。しかし、「話すこと・聞くこと」の能力に関わる研究、中でも話し上手・聞き上手に至る発達的変容を取り扱った教育心理学的研究は、現在のところ極めて少ない。

そこで、本研究では、都内公立小学校における 5 年生の教室を対象に、国語科における「話すこと・聞くこと」単元、ならびに授業時間外の生活場面における児童の様子を、6 月から 12 月の間、調査・観察の対象とした。具体的には、質問紙調査、担任教師へのインタビュー（面接）、授業場面、および清掃場面（授業外の場面）の観察、授業直後の児童に対する授業内容についての再生課題、担任教師へのフィードバック等を実施し、量的・質的手法の両側面から、縦断的・多角的な検討を行った。

本研究の特徴は、「話すこと・聞くこと」に関わる教師と児童の目標観の関連と変容、学習指導要領に基づく内容の定着を、質・量の両側面から縦断的に研究し、話し上手・聞き上手に至る発達的変容を明らかにする点である。

本研究の目的は、1 つに、児童の発言・再生のスタイルの時期的な変容（目的 1）、2 つに、指導・学習場面の違いが発言・再生のスタイルに及ぼす影響（目的 2）、3 つに、教師の指導目標と指導との関連、及び児童の学習目標と学習の実際の時期的な変容（目的 3）を、それぞれ明らかにすることであった。

研究の結果、目的 1 については、教師が聞き上手と捉える児童は実態に即した指導を受けやすいことが示唆され、児童が話し上手・聞き上手に至るには、聞く力の発達が基盤となることが推察された。目的 2 については、話す力・聞く力の発達は行動面にも変化をもたらすことが示唆され、話すこと・聞くことの指導では授業時間での直接的な言語活動の指導のみならず、授業時間外の行動面の指導も併せて行う必要性が示された。目的 3 については、児童が苦手とする能力は、教師と児童の目標の共有によって指導・学習の効果が得られやすくなることが示唆された。

以上のことから、話すこと・聞くことの指導においては、特に教師が聞き上手と捉える児童は聞くことの能力が高まりやすく、児童が話し上手・聞き上手に至るには聞く力の発達が基盤となることが示唆され、聞くことの指導の重要性が明らかとなった。

また、教師は児童の苦手とする能力に注目する傾向が強いことから、指導・評価の困難さが指摘される聞くことの指導においては、研究者による教師への調査・観察結果のフィードバックの実施方法を工夫、改善することにより、指導の効果が得られやすくなる可能性を指摘した点で、本研究は教育的意義があると考えられる。

研究成果発表方法

梶井芳明 2011 話し上手・聞き上手に至る発達の予測的知見（2）

：教師および児童のスピーチに対する評定・評価結果の内容に着目して

日本教科教育学会全国大会論文集，208-209.

梶井芳明 投稿中 話し上手・聞き上手に至る児童の発達過程の予測的知見（2）

：教師ならびに児童の評定・評価結果に基づく数量的・質的考察

阿彦翔大・梶井芳明 2012 話し上手・聞き上手に至る児童の発達過程の予測的知見（3）

：教師の実態把握が児童の「話すこと・聞くこと」の発達に及ぼす影響

東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅰ 第63集，145-157.